

令和元年6月25日現在

機関番号：37703

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04012

研究課題名(和文) アルコール嗜癖者の回復に寄与する援助グループは自助グループ的性格を有するのか？

研究課題名(英文) Does the support group contributing to recovery from alcoholism have similar characteristics to self-help groups?

研究代表者

松本 宏明 (MATSUMOTO, HIROAKI)

志学館大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：90625518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：アルコール依存症からの回復に寄与するサポートグループの基盤として「重なり合いを否定しない専門性」が提示された。各研究がそれぞれ提示した重なり合いとは、有期限の医療支援と無期限の非医療支援との重なり合い、依存症形成時の自己治療的側面と回復時の対人関係との重なり合い、専門性を持つスタッフと当事者との重なり合い、援助者の媒介により見出される参加者間の重なり合い、多声モデルと中心主義的なモデルという理論モデルの重なり合い、であった。専門家にとってこの「重なり合いを否定しない専門性」は、援助の方向性と、患者に対する回復希望とをともに醸成するシステムとしての回復モデルの基盤となすものと位置付けられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アルコール以外にも薬物やゲームなど、近年依存症は社会問題として前景化している。一方、依存症からの回復方向性は十分共有されていない。また、私たちは依存症への恐怖等の理由から、自身と依存症とのつながりをなかなか認めようとしない。そして、この否認は本来回復をサポートするはずの援助者にも無縁ではない。一方本研究において示された「重なり合いを否定しない専門性」という方向性は、依存症の回復や、援助者と当事者との重なり、当事者間の重なり等、なかなか見えづらいがすでにあるつながりや重なりに焦点をあてることで、依存症者の回復、ひいては援助者の負担軽減にもつながることを示す。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have shown "specialty that does not deny overlap" as the basis of the support group that contributes to recovery from alcoholism. Each study showed the following overlap: 1 Overlap of term medical support and indefinite non-medical support 2 Overlap between self-care aspect at the onset of addiction and interpersonal relationship at recovery from addiction 3 Overlap between profession and group participants 4 Overlap between group participants 5 Overlap between theoretical models of multi-voice model and centralist model. For the profession, "specialty that does not deny overlap" is defined as a recovery model that extends both the direction of assistance and the recovery hope for patients.

研究分野：臨床心理学

キーワード：アルコール アディクション 依存症 グループ 専門職 家族療法 オープンダイアローグ

## 1. 研究開始当初の背景

アルコール嗜癖は、当事者と家族に多様な生活上の困難をもたらす。推計患者数は約 80 万人(厚生省, 2004)、対策の法整備の動きも高まる(アルコール健康障害対策基本法)精神保健福祉の喫緊の課題である。回復に際しては、AA(アルコホリック・アノニマス)や、断酒会など、自助グループの効果が広く認められ(安田・松下, 2001)ているが、敵意や抵抗感の強い患者、重複障害患者にはさほど有効ではない(松本, 2011)。したがって援助者がメンバーを自助グループにつなげたり、自助グループのエッセンスを援助者自ら活用する役割が重要となる。自助グループとは別に、医療機関や保健所で実施される援助者が関わるグループは、「サポートグループ」と称される。研究分担者(精神保健福祉士:岡田)が2002年から隔週延べ250回実施してきた「A病院アルコールミーティング(以下本ミーティング)」も、「サポートグループ」のひとつである。現在の参加者(約30人)はA病院の入院患者・外来通院者・他病院通院者がほぼ同数に近い。スタッフは、医師・看護師・精神保健福祉士・作業療法士・臨床心理士ら多職種から構成される。内容は特定のテーマに基づくのではなく「言いつばなし聞きつばなし」であり、スタッフも評価的指導的関わりではなく、自身の経験や困難を自然に語る自助グループに近い場が生成されている。本ミーティングの特徴は、11年間にわたり同一の援助者が関わる参加者属性の多様性 多職種の参加 スタッフも嗜癖者から学ぶ自助グループに近い形態、とまとめられる。

現在アルコール回復プログラムで実施されるグループの多くは心理教育的要素が強い。しかし、自助グループの効果が認められているアルコール嗜癖臨床領域の場合、自助グループに近い本ミーティングのような「サポートグループ」が回復に有効な可能性があり、より実証的な効果検証が必要と考えられる。

## 2. 研究の目的

当事者と家族に多大な生活上の困難をもたらすアルコール嗜癖だが、従来援助者の役割は、回復に有用とされる自助グループへの紹介など、限定的に捉えられてきた。しかし、サポートグループにおいて援助者が自助グループの要素を取り込むことで、回復に一層寄与しているのではないかと。

本研究では、医療機関で12年間継続中のアルコールミーティングの実態調査を柱に、援助者が関わる嗜癖者の「サポートグループ」が回復に果たす役割を検証し、嗜癖者がグループを能動的に活用しつつ回復に向かう回復モデルを提示する。具体的には、1.アルコールミーティングの実態調査から、嗜癖者の回復プロセスを提示 2.援助者もメンバーとなる自助グループ的「サポートグループ」の可能性を提示 3.援助者が自助グループの機能を積極的に活用する援助方向性の提示 4.アルコール嗜癖臨床に携わる援助者の自己効力感を育むことを目的とする。

研究の軸としては、自助グループ的なサポートグループが嗜癖からの回復に果たす役割を、グループについての実態調査や、嗜癖者の回復プロセスの検討、援助者のインタビュー調査を通じて明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究課題においては、実践的な知見と理論的な位置づけとを組み合わせ研究結果として提示することを重視する。この方向性に沿って、文献研究と実証研究とを組み合わせる研究スタイルを採用した。文献研究は、理論研究と文献レビューという方向性であり、実証研究については、インタビューを中心とした質的研究および臨床事例研究という方向性である。これら研究が、それぞれ研究1~研究5としてまとめられた。

### 研究1 サポートグループの理論的基盤についての検討

松本(2017)では、サポートグループの理論的基盤として、家族療法の領域で着目されているオープンダイアローグの背景にあるベイトソンの学習理論について検討を行った。また、松本・山口(2018)では、このオープンダイアローグの考え方を援用した実践について、チームアプローチを導入した事例研究を行った。研究1ではこれら2つのプロセスから、サポートグループの理論的検討を行った。

### 研究2 サポートグループの基盤となる ARP(アルコールリハビリテーションプログラム)の文献検討

アルコール依存症の治療に医療が関わるサポートグループについて先行研究が少なかった。そこで、基盤となる医療でのアルコール依存症への治療について、文献研究を行った。具体的には、岡田ら(2016a)において研究内容の一部であるサポートグループと重なり合うARPの実践について、文献検討を行った。

### 研究3 サポートグループの実践検討 1.参加者へのインタビュー調査

サポートグループの実践検討のため、岡田ら(2016b)において、グループ参加者へのインタビューを行った。アルコール依存症患者を主たる対象としたサポートグループに長年参加し、アルコール依存症からの回復を続ける調査対象者に対し、半構造化面接法によるインタビュー

調査を実施し、KJ法を参考にした分析を行った。

#### 研究4 サポートグループの実践検討 2. 援助者へのインタビュー調査

サポートグループの実践検討のため、サポートグループにおける援助者の語りを通してみえてくる援助者の変容に焦点を当て、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。岡田(2016)の基礎調査に基づき、岡田ら(2017)においては、アルコール依存症患者を主たる対象としたサポートグループにスタッフとして参加経験のある援助者にインタビュー調査を実施し、現象学的分析を行った。

#### 研究5 近縁アディクションとしてのゲーム依存におけるサポートグループの検討

サポートグループについては、アルコール依存症以外の近縁アディクションの検討も重要と考えられる。ゲーム障害(依存)は、ICD11にも採用され喫緊の課題となるアディクションである。そこで、平成28年6月に研究代表者が立ち上げたインターネット・ゲーム依存家族会について、現状や実践での工夫、今後の課題について、概観的な検討を行った。

### 4. 研究成果

本研究では、文献研究と実証研究とをそれぞれ個別的に進めた。続いて研究1で提示された理論的基盤に基づき、研究成果が研究1～研究5を通底するテーマとして提示された。

#### 研究1 サポートグループの理論的基盤の提示

松本(2017)では、専門家チームが訪問し密な対話を重ねる提示したオープンダイアローグの理論的検討を行った。オープンダイアローグの基本原則とされる「不確かさに耐えること」を、ベイトソンの学習の実践方向性として捉えることで、臨床心理学をはじめ、対人援助領域における重なり合いを否定しない専門性、という方向性を提示した。この方向性に基づき松本ら(2018)では、チームアプローチでのセラピストとサブセラピスト、および当事者の重なり合いがもたらす臨床的意義について検討した。この「重なり合いを否定しない専門性」が、臨床心理領域でのチームアプローチという対人援助実践でも有効であり、オープンダイアローグの多声モデルと、医療での主流である中心主義的モデルとの共存方向性となりえることを示した。

#### 研究2 サポートグループの基盤となるARPの検討から医療と非医療との関係性を提示

岡田ら(2016a)では、我が国の医療領域におけるARPに関する文献を概観し、ARPの変遷と今後の課題を検討した。論文は、「ARPの検討」「カスタマイズ」「認知行動療法」「新プログラム」「紹介」「クリニカルパス」に分類された。今後の課題として、個別性に対応したプログラム 技法・方法論の課題、ARPとSHG(セルフヘルプ・グループ)との関係性が見出された。アルコール臨床において医療的支援は、まず非医療的支援の確立の後方支援から始まり、次にSHGに学びながら医療としてのARPを開発し、徐々にARPはSHGから独立していく。この医療的支援と非医療的支援の重なりに着目してその変遷を概観した。ARPが独立によりSHGを軽視していくのではなく、有期限の支援としての医療的支援と、生涯にわたる無期限の支援としての非医療的支援の協働という形をとる必要性が示された。

#### 研究3 サポートグループの実践検討 1. 参加者のインタビューから回復での対人関係の意義を提示

岡田(2016b)による参加者へのインタビューの逐語データから51枚のカード、23個の小グループ、10個の中グループ、7つの大グループに分類された。各グループ間の関連も図式化された。これによりアルコール依存症の形成過程にある自己治療的側面について、回復時には、アルコール以外、特に対人関係で担う重要性が示唆された。

また、当事者の視点を通してサポートグループにおける当事者と援助者の参加の仕方が明らかになった。具体的には、多様なスタッフの関わり、援助者が支配的ではないこと、援助者が自分自身の事を発言するという、援助者と当事者とのより対等な関係が、当事者の自由な語りを生み出しており、当事者もまたスタッフの事を見極めていた。スタッフがスタッフ役割から降りることで、サポートグループは、安心安全な場所となっていた。

#### 研究4 サポートグループの実践検討 2. 援助者へのインタビューから非審判的態度の意義を提示

岡田(2016)では、参加者の中から特に援助者の語りを通してみえてくる援助者の変容に焦点を当てた。結果、援助者は依存症患者から学ぶことで非審判的態度を身につけることが、援助者としての成長につながることを示唆された。

また、岡田ら(2017)では、サポートグループに参加経験のある看護師の語りへの現象学的分析により援助者の心理構造について検討した。参加メンバー、スタッフ、ファシリテーターが分け隔てなく参加する場にサポートグループになっており、メンバーにはもちろんスタッフにも貴重な場と感じられていた。また、スタッフとして感情が揺さぶられるときも、サポートグループという場を守るために感情をコントロールすることができていた。サポートグループは、回復を続けるアルコール依存症患者に出会うことで、スタッフにとって回復の希望につな

がる場となっていることが示唆された。

## 研究5 ゲーム依存におけるサポートグループの検討から参加者間の媒介としての援助者役割を提示

松本・増田(2018)、松本(2019)において、ゲーム依存の家族会での2年間における実践を概観的に検討した。ゲーム依存はアルコール依存と比較してサポートグループも少なく、グループの方向性については試行錯誤が続いている。ただ、約2年の実践を通じて、援助者の役割は、参加者の語りを通して、他の参加者が回復モデルとしての意味づけを見出しうるような、つまり、参加者間が互いの境遇や苦悩の重なり合いを実感することに寄与しうるような羅針盤かつ語りを支える伴走者だと捉えられた。

**総括** これら研究1～研究5を通底するテーマが改めて検討された。まず、研究1において、オープンダイアログでの理論的検討から「重なり合いを否定しない専門性」というテーマが援用された。続いて、この「重なり合いを否定しない専門性」というテーマが、研究2～研究5で得られた研究成果と照合され、妥当性が検討された。結果、各研究における援助方向性として、この「重なり合いを否定しない専門性」がそれぞれ妥当と考えられ、アルコール依存症等アディクションからの回復に寄与するサポートグループの基盤として改めて提示された。各研究において提示された重なり合いは、それぞれ以下のとおりである。

- 研究1 多声モデルと中心主義的なモデルという理論モデルの重なり合い
- 研究2 有期限の医療支援と無期限の非医療支援との、重なり合い
- 研究3 依存症形成時の自己治療的側面と回復時の対人関係との、重なり合い
- 研究4 専門性を持つスタッフと当事者との、重なり合い
- 研究5 援助者の媒介により見出される参加者間の、重なり合い

サポートグループでは、専門家が入りつつ自助グループ的性格が維持されることが重要と考えられる。したがってサポートグループがアディクションからの回復に果たす役割としては、専門家が特権的に振る舞う従前の専門性とはまた異なる形態での専門性が必要と考えられる。それが、本研究全体を通して提示された「重なり合いを否定しない専門性」であった。この「重なり合いを否定しない専門性」は、サポートグループに携る援助者にとって援助の方向性と、患者に対する回復希望とをともに醸成する、システムとしての回復モデルの基盤と位置付けられる。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

1. 松本宏明・山口恵理子 大丈夫だと無理してしまう男性とチームとの安全な対話 志學館大学心理臨床研究紀要 8.2018.13-27.
2. 岡田洋一・石井宏祐・松本宏明, 岡田明日香 アルコール臨床のサポートグループに関わるスタッフの経験 福祉社会学部論集 36(2).2017.41-51.  
<http://id.nii.ac.jp/1654/00000874/>
3. 松本宏明 オープンダイアログが照らし出す臨床心理学の専門性—「不確かさに耐えること」をベイトソンの学習として捉える試み 人間関係学部研究紀要 38.2017.13-20.
4. 岡田洋一・松本宏明・石井宏祐・岡田明日香 アルコール依存症の形成と回復 - ある男性の対人関係を軸とした語りから - 鹿児島純心女子大学こども発達臨床センター紀要こども学研究.8.2016.63-70.
5. 岡田明日香・岡田洋一・松本宏明・石井宏祐 精神科領域におけるアルコール・リハビリテーション・プログラムに関する文献の概観 - ARP の変遷と今後の課題 - 鹿児島純心女子大学こども発達臨床センター紀要こども学研究 8.2016.71-83.
6. 岡田洋一 アルコールミーティングへの参加が促す援助者の変容：成長につながる非審判的態度.35(2).2016.1-11.
7. 岡田洋一 アルコール臨床における医療的支援と非医療的支援の重なり：アルコールリハビリテーションプログラムとセルフヘルプグループに着目して 鹿児島国際大学福祉社会学部論集.34.2015.31-43. <http://id.nii.ac.jp/1654/00000873/>

[学会発表](計5件)

1. 松本宏明・増田彰則 ゲーム依存家族会の実践報告 第58回日本心身医学会九州地方会 2019
2. 松本宏明 心療内科クリニックにおけるゲーム依存家族会の実践報告 日本小児心身医学会第36回学術集会シンポジウム 2018
3. 松本宏明・山下協子・増田章則 心療内科クリニックにおける ネット・ゲーム依存家族会の立ち上げと課題第58回日本心身医学会 2017
4. 増田章則・山下協子・松本宏明 低年齢化する子どものネット・ゲーム依存第35回日本小児心身医学会 2017

5.石井宏祐・松本宏明 プリーフセラピー入門 初学者の方が陥りやすい行き詰まりのポイントと対処のコツ日本プリーフセラピー協会第9回学会議 2017

〔図書〕(計 0 件)  
〔産業財産権〕  
出願状況(計0 件)  
取得状況(計 0 件)  
〔その他〕

**6. 研究組織**

(1)研究分担者

研究分担者氏名：岡田洋一  
ローマ字氏名：Okada Yoichi  
所属研究機関名：鹿児島国際大学  
部局名：福祉社会学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：20359185

研究分担者氏名：石井宏祐  
ローマ字氏名：Ishii Kosuke  
所属研究機関名：佐賀大学  
部局名：教育学部  
職名：准教授  
研究者番号(8桁)：30441950

(2)研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。